

【報告】

ボードレールとハーン 東京帝国大学の講義録から

中島 淑恵（富山大学）

はじめに

本報告は、2015年11月5日にヴァンダービルト大学 W.T.バンディーセンター (W.T.Bandy Center for Baudelaire and Modern French Studies) で行われたシンポジウム「カルチュラル・モダニズムⅣ：日本におけるボードレール」(Cultural Modernism IV: Baudelaire in Japan) において筆者が発表を行った「ボードレールとラフカディオ・ハーン (Baudelaire and Lafcadio Hearn)」の概要報告である。この発表に基づく論文はいずれ同大学研究紀要に掲載される予定であるが、ここでは日本語でその概要のみを示しておく。

発表の概要

本発表は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲、1850 - 1904）における、アメリカ時代のボードレールの受容と来日後の講義録に見られるボードレール評に関するものである。

実は、ヴァンダービルト大学のボードレール研究の世界的権威であり、上掲センターの創設者でもあるウィリアム・バンディが1981年に来日した際に、東京大学と島根大学で「ボードレールとハーン」というタイトルで講演を行なっている。その翻訳は、早稲田大学教授の池田雅之氏により『想像力の比較文学』に発表されており、今回の発表を準備する際にも、この論考は利用させていただいた。

さて、ラフカディオ・ハーンというと、日本では「耳なし芳一」や「雪女」などの『怪談』の作家として有名であり、あるいは、現在小学生用の教科書に収録されている「稲村の火」の再話者として、広く「津波」の語を英語圏に知らしめたものとして今日ではむしろ知られているかも知れない。若い人々の中には、『怪談』は小泉八雲という日本人が日本語で書いたものと信じて疑わない者もいる始末である。また、英語圏に目を向けると、ハーン最後の著作『神国日本、その解明』は、第2次世界大戦中から占領期において日本人の精神を知るために連合国側で広く読まれていて、今日でも英米の外交官が来日するときには日本理解のために読むことが推奨されている図書であるという一面もある。

もともと、今回ヴァンダービルト大学で発表を行った時は、1名の定年退職した教授を除いて、英語圏の教授陣が誰も、ハーンの名前すら知らなかったことは、筆者にとっては大きな驚きであった。

という訳で、ハーンは日本でもアメリカでも、少々誤解された、または忘れ去られた作家であるといえるだろう。しかし、ハーンがその東京帝国大学における講義の中で、ボードレールを始めと

する様々な詩人・作家の作品を紹介しているのが、日本で最初の紹介・言及であるというケースが相当あることから、日本におけるフランス文学受容および研究のイニシエーターの一人としてもっと注目されてもよい存在であるといえるのではないかと思う。また、ハーンが東京帝国大学で行った講義を受講した学生からは、上田敏を始めとする数多くの学者や教育者が巣立っている。巷ですでに黒岩涙香が『嗚呼無情』や『巖窟王』を発表していた時代ではあるが、明治日本におけるフランス詩の受容（なぜかハーンはその講義の中で、小説ではなくもっぱら詩を引用している）という観点からは、ハーンはもっと注目されてよい存在であるといえるだろう。

ハーンとフランス語またはフランス文学の関係を説明するために、簡単にハーンの生涯を概観しておく。ハーンは1850年、英国軍医の父とギリシア人の母の元に、ギリシアのレフカダ島で生まれ、2歳の時に母とともにダブリンに渡る。ハーン4歳の時母親はギリシアに帰国するが、これが親子の永遠の別れとなった。父は単身赴任が多く、また早くに亡くなり、幼いハーンを育てたのは大叔母のブレナン夫人だった。この大叔母がかなりの資産家で、ハーンをカトリック系の学校に学ばせ、ハーンはまずそこでフランス語を学んだようである。未だはっきりとした証拠は見つからないが、ハーンは13歳前後の時期にフランスのイヴトーの神学校に留学したという説もあり、また、それは大叔母が破産して学校をやめざるを得なかったハーン16歳以降の頃であるという説もある。また、ハーンは19歳で仕事を求めてほぼ一文無しの状態で移民船でアメリカに渡るが、その時に従来言われていたリヴァプールではなく、フランスのルアーヴルからニューヨークに渡ったという説もあり、幼少時からハーンとフランスまたはフランス語が密接な関係にあったことは確かなようである。また、とくにフランス滞在などせずとも、当時の英国における富裕な階層で基本的な中等教育を受ければ、国際的に通用する社交用語としてのフランス語の習得はむしろ当然のことであったともいえる。いずれにせよ、ハーンのフランス語力の形成・フランス滞在の有無、フランス人脈の有無については、今後実証の俟たれるところでもある。

ともあれ、アメリカに渡ったハーンは、すでに相当のフランス語力を持っていたはずであり、ジャーナリストとして働く傍ら、フランス文学のさまざまな作品、とりわけゴーティエやフローベールの小説、ボードレールの散文詩の英語訳を発表している。また、ボードレールの散文詩に触発された随想を発表してもいる。とりわけニューオリンズに移住してからは、フレンチ・クレオールの世界に沈潜し、また新聞記者としての収入も安定して、多くの書籍を買い求めた。ハーンの旧蔵書は、今日私の勤務校である富山大学の附属図書館が所有し、ヘルン文庫と名付けられているが、ニューオリンズ時代におよそ500冊の書物を購入したと言われている。また、来日直前の二年間は仏領西インド諸島、とりわけマルティニークに長く滞在し、現地の民話の聞き書きを行っている。この時の聞き書きの、アルファベットによる音写や解釈の正確さから見て、ハーンはフランス語を自由に読み書きできただけではなく、おそらくかなり自由に聞き話すこともできたのではないかと考えられる。この後、1890年に来日したラフカディオ・ハーンは、まず、島根県松江尋常中学校および島根県尋常師範学校の英語教師となる。この地で後に妻となる小泉セツと出会うが、およそ1年後にはセツの家族を伴って熊本に赴き、第五高等学校の英語教師となる。その後一旦は著述業に専念しようと神戸に落ち着くが、当時の学長の招請を受けて、1896年には東京帝国大学文科大学

の英文学科の講師となる。また、この年に帰化の申請が認められ正式に日本人となり、セツとも正式に結婚する。これより 1903 年 3 月までの 8 年間にわたり、ハーンは東京帝国大学で英文学や英文学史などの科目を担当することとなる。当然のことながら、ハーンの担当科目は英文学および英文学史なのであったが、それらの講義の中でハーンは、何度となく、ユゴーやボードレールといったフランスの詩人に言及し、その作品をフランス語で引用し、説明的な英訳をつけた上で解説している。当時の東京帝国大学の授業は、教員の裁量がかなり許されていたようで、すでにフランス文学科は別に存在していたのであるが、それとは別にハーンの授業の中で、当時の学生たちはフランスのロマン派を中心とした詩人たちの作品を知ることになったのである。

熊本時代あたりから外人教師として収入の安定したハーンは、たびたび横浜に赴き、あるいは郵送で洋書を購入している。それが今日の富山大学のヘルン文庫の元になっているのであるが、2 分冊になっている『神国日本』の手書き原稿を含めると全部で 2435 冊あり、うち洋書が 2069 冊、そのうち英語の本が 1350 冊、フランス語の本は 719 冊ある。これは、当時の個人の蔵書としてはかなり多い方なのではないだろうか。また、この冊数だけからみても、ハーンの教養あるいは学識において、フランス語の本の占める位置はかなり重要なのだといえるだろう。また、来日以降のハーンの本の購入の仕方は、自分の好きな本を散発的に買うといったものではなく、たとえばバルザックやミシュレの全集をまとめて購入するなどの、いわゆる「大人買い」が目立つのと同時に、「文学史」やアンソロジーなど、学生たちにまんべんなく知識を伝授するために、個人の嗜好を超えた書籍の購入の仕方をしていることが分かる。このような蔵書が講義のバックグラウンドを形成していることは確かであり、また、アメリカでジャーナリストをしていた若く野心的な時代のハーンと、日本で家族を成し教師となって成熟したハーンとで読書傾向が異なっているのは、当然のこととも言えるだろう。

ところで、ヘルン文庫にはボードレールの著作は 3 冊収められている。うち 1 冊はハーンがアメリカ時代に購入し、来日時にはアメリカの友人に託され、小泉家に死後返却された『小散文詩集』である。残りの 2 冊はいずれも日本で購入したもので、うち 1 冊は『悪の華』、もう一冊は『小散文詩集』である。このことから分かるように、ハーンにとってボードレールは、『悪の華』のボードレールではなく、『小散文詩集』のボードレールなのであり、そのことについては東京帝国大学の講義の中でも何度となく言及がある。ハーンは『悪の華』のボードレールを「いささか気の狂った男」とし、そのタイトルを「毒の花とでも言った方がその内容を忠実に表している」と言っている。これに対してボードレールの『小散文詩集』のことは、「すばらしい宝物」と評し、「詩の体裁をとったフランス語の並外れた資源を作り上げた (he extraordinary resources of the French language in prose of poetical form.)」あるいは「この本の出版によって (新しい詩的散文が見事に確立された (The new poetical prose was fairly established by the publication of this book))」とまで語っている。

ところで、フランス文学史における詩的散文というか韻文詩の創始者といえば、アロイジウス・ベルトランの名が即座に思い浮かぶ。ハーンも講義の中でベルトランについても言及してはいるが、その評価は、当時エジンバラ大学の教授だったジョルジュ・セインズベリーの著書『フランス文学

小史 (*A short history of French literature*)』をほぼ踏襲したものであり、特に独自の評価を下しているという訳でもなく、また高い評価を与えているという訳でもない。さらに言えば、ベルトランの『夜のガスパール』は蔵書には存在しない。このような作家あるいは作品に対する評価は、当然のことながら講義を聞いていた学生のそれにも影響を及ぼしたことだろう。たとえばハーンが最高の弟子として激賞した上田敏の後年の訳詩の選定にあたって、それは影響があったと考えるべきなのではないだろうか。

また、ハーンのこのようなボードレールの散文詩への高評価については、ハーン自身の作品への影響もまた考えてみるべきものであろう。ハーンは講義の中では幾度となくさまざまな「詩」を引用し、詩論を展開させているが、自分の天分は本質的に散文にあり、詩的な散文家としての理想をボードレールの文体に見ていた可能性がある。

ハーンはボードレールの散文詩「月の恵み」を生涯に2度発表している。ひとつはニューオリンズ時代の1882年(ハーン32歳)にタイムズ・デモクラット紙に発表したもの、もう一つは東京帝国大学の講義の中で、推定1897年(ハーン47歳)に学生たちにこの詩を紹介したものである。この二つの英訳は、様々な点でいろいろ異なるものなのであるが、中でも一番異なっている点が、講義録の英訳では、省略されているということである。この省略はおそらく意図的なものと思われる。この一節は、詩の中で月の恵みを受ける「お前(tu)」に向き直って、紳士が自分の愛人である女性に語りかけている部分で、語りのあり方も大きく変化するところである。なぜハーンはこの1節を東京帝国大学の講義では省略したのであろうか。たぶん一つは教育的配慮のためかと思われる。というのもここで詩人は愛人の足元に寝転がって語っているからであり、これは日本の真面目な学生たちには刺激が強すぎると考えたのではないかと考えられるからである。しかしもうひとつは、ニューオリンズ時代の英訳からすでに胚胎していたことではあるのですが、英語には男性形と女性形がないために、母なる月が恩恵をもたらす相手であるtuの性別が、様々な箇所では不明になり、さらに講義録の英訳では最後の一節がないためにその性が女性であると判断する材料がなくなることになる。そうすると、月の恵みを受ける相手は男性である可能性も出てくることから、実は男性である自分自身もまた月の恵みを施されたものである、という解釈も成り立つようになるのである。このことは強引なこじつけのように思われるかも知れないが、ニューオリンズ時代にハーンがボードレールの小散文詩集に感化されて発表した詩的散文による随想集(*Fantastics, and Other Fancies*, Charles Woodard Hutson, 1911)には、自らを月の恵みを施された者に同一視する空想が展開されている箇所がある。そしてこの同じ随想の中では、自分が月の恵みを受ける客体に同一視されるのと同時に、月は、恵みを与える母なる存在から、月光のもと亡霊のごとく発ち現れる理想の女性、幽霊妻(a phantom bride)に同一視されるものとして描かれているのである。

こうして考えてみると、ハーンの物語に現れる女性たち、たとえば『お貞の話』のお貞や、『雪女』のお雪は、必ずしも日本の伝承に由来する存在ではないのかも知れない。実は、ハーンが聞き書きをしたクレオール物語にも、ヘルン文庫の蔵書でハーンが夥しい書き込みを行っている『ギリシア詞華集』の中にも、先立った妻が亡霊として現れる話は見られるのである。今後は、アメリカ時代の随想集におけるボードレールの影響をもう一度詳細にたどり直すと同時に、日本の伝承か

ら編み出されたといわれるハーンの物語を、改めてその細部にわたって、ボードレールその他のフランス作家の影響の有無を含めて詳細に検討する必要があるのではないだろうか。

ところで、この発表を行った翌日、バンディ・センターの司書の方から、バンディの遺したファイルの中に、ハーンに関するものがあつた、という報告を受けた。センターのスタッフも、ハーンについては筆者が発表するまでよく知らなかったらしいのであるが、筆者の発表が終わってから気になってバンディの遺稿を確認してみると、ハーンに関する資料のファイルが幅にして 10 センチほどある、これほどの量の資料は、ボードレールやポーを除いて他の作家には見られない量だ、という説明を受けた。そこでシンポジウムの終わった翌日土曜日に朝からセンターに赴いて、それらの資料を見せていただいた。ハーン関連の書籍の量は大したことがなかったが、ハーンに関するファイルの中に、まさしく「ボードレールとハーン」と題したタイプ打ち原稿が 60 枚ほどあつた。それは、いずれ本にまとめるつもりで清書したもののように思われ、未だ草稿段階でバンディ自筆による書き込みもあるものであつた。どうやら、1981 年に来日して講演を行った後、さらに気になって網羅的な調査を行い、出版を考えて原稿にしつつあつたものなのではないかと考えられる。バンディは 1989 年に亡くなっているのに、それまで調査と執筆をつづけていたものと思われる。その中には、筆者が自分の発表の中で指摘したようなこと、たとえばボードレールの「月の恵み」に二つのハーンによる英訳があること、後年のものには最終段落が欠けていること（筆者の知る限りこのことを筆者より前に指摘しているのはバンディだけである）。

この草稿を読んでみると、ハーンに関するバンディの並々ならぬ関心の強さが分かる。なぜならば、バンディの見解によれば、ハーンは、日本における最初のボードレール紹介者であるだけでなく、アメリカにおいても、ごく初期のボードレール紹介者であつたのであり、とりわけ小散文詩集については、ハーンがその卓越した読み手であつたから、という理由によるものようである。今日のアメリカではほとんど忘れ去られた存在のハーンであるが、そのアメリカ時代の著作についても精査する必要があるように思われる。また、バンディの草稿はおよそ 60 枚程度で終わっており、どう見ても前半部分という感じである。バンディのメモ書きによれば、ハーンにおけるボードレール受容の問題を考えるとときには、来日以降のハーンの、とりわけ著作においてボードレールがどのような影響を及ぼしているかを考える必要があり、それについては自分にはもう時間が足りない、という旨の発言を遺している。実はこのことは、筆者が帰国してから入手した、長野隆著作集（参）に収められた「ウィリアム・バンディーヴァンダービルト大学・ボードレールセンター」という報告（初出「詩論」第 12 号、詩論社 1988 年）の中でもバンディが語っていることである。

シンポジウムの朝、皆が来る前に、センターの呼び鈴が幾度となく鳴った、と司書の方が語っていた。彼女は「あれはバンディさんが鳴らしたのよ」と言っていたが、筆者はひょっとしてバンディもさることながら、ハーンもその場所に来ていて、バンディと出会つたのではないかと考えている。そして、「ハーンとボードレール」という著書をこの世で完結させるよう、頼りなくはあるがここまでたどり着いた日本人の筆者に命じているような気がしてならなかつた。この三月にセンターを再訪し、関連資料の調査を行う予定である。

東京帝国大学の講義録については、Lafcadio Hearn, *Complete lectures, On Art, Literature and Philosophy*, edited by Ryji TANABÉ, Tesisaburo OCHIAI and Ichiro NISHIZAKI, The Hokuseido Press, Kanda, Tokyo, 1932.を参照し、引用も同書によった。

それ以外のハーンの著作については、原則として *The writings of Lafcadio Hearn in Sixteen Volumes*, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1922.を参照した。

また、T.W.バンディにおける「ボードレールおよびハーン」に関する著作として、池田雅之『想像力の比較文学 フォークロア・ジャポニズム・モダニズム』成文堂、1999年、長野隆『長野隆著作集（参）エッセイ他』和泉書院、2002年がある。